

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：14201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04125

研究課題名（和文）種苗生産における女性熟練労働に関する社会学的研究

研究課題名（英文）The sociological study of the agricultural technology utilized by women in nursing seedling and seed production

研究代表者

柏尾 珠紀（Kashio, Tamaki）

滋賀大学・研究推進機構・研究員

研究者番号：70414034

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、種苗生産における女性熟練労働の実態把握を行うことで、その社会的意義を検討した。苗生産農家、採種農業者、自家農業従事者から聞き取り調査を行い、種苗の生産技術のなかにある女性の専門的作業を抽出し検討することで、女性の熟練労働が持つ社会経済的意義を明らかにすると同時に、女性の熟練技術が農村地域社会の発展的展開にいかに関与しているのかについて考察した。その結果、種苗生産のなかで発揮されている女性の専門的技術がそれぞれの農業経営はもちろんのこと、農村地域社会の発展にも重要な役割を果たしていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、種苗生産における女性の熟練労働の実態を解明し、それらが地域社会の発展に果たす役割を考察したことで、女性農業者の専門的技術を農業生産の技術体系の中に位置づけることができた。また、農業部門における女性の熟練労働を検討したことにより、ジェンダー研究や農村女性研究を推進すると同時に、農業における女性施策の方向性を考える手がかりを得た。

研究成果の概要（英文）：This research attempted to reveal the agricultural technology utilized by women especially in nursing seedlings and seed production. Three types of farmers, seedlings farmers, seed producers and self-employed farmers were investigated through interview and questionnaire surveys. Considering previous studies and the finding from the interviews, the research verify that the rural women's expertise played an important role to sustain agriculture and rural society.

研究分野：農村社会学

キーワード：農村女性 女性農業者の技術 種苗生産 ジェンダー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

農業生産における種苗の重要性はあらためて言うまでもない。そのため種苗の研究は植物としての高品質性や病害虫への耐性に強い関心が払われ、優良で均質な種苗を生産する技術やその生産性の向上など、育種学や作物栽培学に集中してきた。だが、種苗生産は未だ人の手による熟練労働が重要な部分を占めている。また、近年は各地域の伝統野菜や地域ブランド野菜が注目を集めているが、その種や苗の生産技術は農家に伝承されたものであり、農村地域の近隣ネットワークによって保有、継承されている。さらにその生産に携わるのは多くが女性である。このような種苗生産の実態把握は進んでおらず、社会科学的研究も希薄なのが現状である。

従来、種苗のかなりの部分は農家によって自家生産されていた。多くの農家で男性が主に稲の育苗で技量を発揮したのに対して、女性は野菜全般の種苗生産を担った。優良な種苗や新品種が次々と開発されると農家も種苗の多くを購入するようになったが、依然として多くの野菜や花の種苗は自家生産されている。種苗の需要は 1970 年代の園芸ブーム以降一般世帯へと広がり、1995 年頃からのガーデニングブームで花苗の需要が増大した。当時、多くの農村女性たちが直売所を活用して、花や野菜の苗販売に参入することで主体性を発揮し、その社会的意義が議論された(柏尾 2007、他)。このような農村女性の主体性や地域社会を再編する力の解明は、秋津(2007)、中道(2008)、藤井(2011)、西山(2012)らによって進められ、2012 年には日本村落研究学会において『農村社会を組みかえる女性たち』としてまとめられた。

営農や販売、暮らしのなかにある農村女性の活動の社会的意義とその波及効果における研究は進んだが、熟練労働を担う女性の社会経済的意義に関する研究は遅々としている。種苗生産においてはジェンダーを扱う研究もなく、女性の熟練労働と社会や経済を結び付ける研究は希薄である。農村女性の熟練労働に関する主体性や経済的な評価は未だなされていない。申請者は地域ブランドである「淀苗」生産を農村女性が手労働で担っている点と、技術保有にはジェンダーネットワークが存在するという点を指摘したが(柏尾 2014)、種苗生産における女性の技術労働の全体像を解明したわけではない。

このような種苗生産の多くは生産組合の下でおこなわれるが、個人的に企業と契約を取り結ぶ女性農業者も存在する。この場合、女性の種苗生産は資本主義に組み込まれたシャドウワークとなる。自家消費の場合も世帯主が販売をおこなう場合も、夫による妻の労働の領有であり、女性労働は不可視化されるという側面を持つ。このような各様の女性の現状は多面的に解明する必要がある。たとえば、女性が直接企業と契約するような現代的関係を解明することで、企業が農村女性の熟練労働を囲い込む過程を解明することができる。種苗生産は農業だけでなく企業活動とも複雑に関連し、そこに農村女性の熟練労働とネットワークが密接にかかわっている。農業の根幹を支え、伝統野菜栽培の再現や地域再生とも密接にかかわる女性活動に関する社会学的研究は喫緊の課題である。以上のことから、種苗生産の実態把握を進め、女性の熟練労働について社会経済的意義に関する研究を深める必要があった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、種苗生産における女性の熟練技術の社会的意義を明らかにし、それらが地域社会の発展的展開に果たす役割を解明することで、農村女性研究を推進すると同時に、農業部門における女性施策の方向を提示することである。農業、農村研究のなかで、こういった種苗生産の担い手やその生産技術の継承・共有のあり方と地域社会との関係はあまり注目されてこなかった。だが、種や苗は農業生産の根幹部分であり、稲以外の種苗生産の技術は女性が保有し継承している場合が多い。これらの女性の技術は自家農業の再生産を可能にし、女性ネットワークを通して地域社会へと伝播されて地域の知的財産になる可能性を持つ。種苗生産の技術は、個人か

ら家族、地域社会、種苗生産企業へと広がりのある関係のなかで創造的継承や囲い込みがなされている。このような女性の熟練労働の実態を解明して、その役割と重要性を農業および農村地域社会のなかに位置付けることで、女性の熟練労働を可視化する。また、農業部門における女性施策の方向を検討する手がかりを得るためにもジェンダー課題を明確にする。

3. 研究の方法

女性の種苗生産は、稲以外の作物の自給的生産、個人出荷のための生産、生産組合の下での生産、企業受託による生産が、ほとんどを占めている。そのためこれらの経営を調査することで農村女性の種苗生産のほぼ全体像を把握することができる。各経営について、大都市近郊および地方都市周辺農村部において女性農業者、生産組合とその関係者にヒアリング調査を行うことで、種苗生産の実態と全体像を把握し、女性の熟練労働とその技術、生産者と地域社会、企業との関わり、技術保有者の経営内での位置付けと地域社会へのインパクトを解明することを試みた。他方で、種苗企業へのヒアリング調査も実施し、また、各種の統計調査および種苗に関する先行研究の分析を行うことで種苗生産の歴史と全体像を把握した。

聞き取り調査では、女性の種苗生産の実態把握と女性が保有する熟練技術に焦点を当てた。初年度は、文献の発掘、統計資料などの分析に着手すると同時に、京阪神の都市近郊の苗生産農家へのヒアリング調査、二年目からは地方都市や大規模経営への調査を実施した。また、三年間を通して全国的に優良苗として名を馳せている京都の淀で調査を実施した。具体的には、生産組合、生産農家、個別農業者、取引先販売店、農協などからお話をうかがい、女性の保有技術、技術労働の従事年数や技術の伝播・共有過程、経営への参画について詳細に調査を行うことで、女性の熟練労働の賦存状況と実態把握に努めた。

種苗企業への聞き取り調査および、企業委託を受けている女性農業者への聞き取り調査では、企業委託による種苗生産の歴史と実態、技術の継承過程の把握を行った。苗生産組合では組合発足以降のデータや資料も入手し、それらは経営別、地域別、生産形態別に分類してデータ化を行った。淀苗の調査では、女性の熟練労働の存在のみならずその歴史的背景や作物別の特徴を解明し、他方で、出荷先の産地との関係についても可能な限り追跡した。女性の技術保有とその意味を農業経営や生産技術体系のなかの位置づけるために、統計データおよび先行研究分析とこれらの聞き取り調査のデータを照合しながら分析を行った。

4. 研究成果

(1) 種苗生産における女性熟練労働の実態把握について

種苗生産については、近年では稲作の育苗以外のデータがほとんどなく、種苗生産や種苗の入手に関する実態も不明であったが、本調査を実施したことにより種苗生産と購入の実態を概ね把握できた。他方、種苗企業や種苗販売者についても、歴史的経緯を含め現状を把握することができた。聞き取り調査の結果は、育苗農家、採種農家、個別農家のそれぞれで、育苗と採種の担い手と技術、技術の変遷、継承過程、品目などについて類型化をしたうえで考察した。

苗生産農家の女性熟練労働について

苗生産農家では女性の熟練労働が明確に存在していると同時に男性の熟練労働があった。生産工程を男女に分けて考察すると、発芽や生育管理、出荷時期の調整などの全般的な労働は男性の熟練技術が優勢であり、女性は接苗生産や移植などの部分的専門的作業を担っていることがわかった。また、それらは可視化できる熟練労働と可視化できない熟練労働とに分けることができた。女性の熟練技術は男性の下にあるため、生産全体としてみると女性の技術は不可視である

という実態が明らかになった。

企業との契約による採種について

種苗企業との委託契約で採種を行う女性農業者の調査では、歴史的慣行として在来種の採種が行われていた特定の集落があることがわかった。企業との取引であるため、採種用栽培の技術は制限的な発展をしたことも解明できた。受託採種は、聞き取り調査で遊ることができた限りでは、明治期にはすでに行われており、昭和期まで集落総出の重要な現金収入となっていたこともわかった。その技術は高齢者と女性が中心に保有し、自家農業での採種にも採用されながら、高齢者から次世代へ継承されていた。調査地における受託採種は、農業者の高齢化と都市化による産地移転によって激減しており、その技術は途絶の危機に瀕している。

個別農家の自家採種と育苗について

個別農家では採種と育苗の多くは高齢女性が担っており、その生産は女性農業者の経験的熟練の技術に依拠していた。近年は高齢化に伴い女性が育苗を担えなくなるケースが増えており、種苗はホームセンターや農協などからの調達に転じていた。しかし、直売所活動が盛んな地域においては、家庭菜園向けの苗生産に従事する高齢女性が多く存在していた。そういった地域では、女性同士の近隣ネットワークを通じた情報交換も盛んであった。交換される情報は、伝統的な育苗や採種技術ではなく、個別に入手した最新の栽培技術に関するものがほとんどであった。男性や種苗企業からもたらされた新しい技術の情報は、女性ネットワークを通して伝播していた。農村の種苗生産の実態からは、地域野菜や伝統野菜の採種、育苗技術はもちろんのこと、農家同士や地域で継承されてきた伝統知や熟練の技術は途絶しつつあり、次世代や新規就農者が参照できるように記録しデータ化することが喫緊の課題であると考えられた。

(2) 男女間の熟練技術の違い、技術共有のネットワークおよび継承システムについて

考察では、苗生産農家、種苗企業受託農業者、自営農業について、女性の熟練技術と専門性、技術の継承や共有、技術習得に関するジェンダーや技術体系における位置づけに注目した。いずれの経営においても女性は専門的な熟練の技能を保有していることが明らかであった。また、個別農家や採種農業者で技術の伝承や継承、共有が困難となりつつある一方で、他方、苗生産農家では技術共有のシステムが構築されており、それが有効に機能していた。女性農業士の育成も含めて、生産の技術体系のなかに女性の技術習得が確実に組み込まれていたのである。情報共有のシステムが女性も含めた範囲で有効に機能している背景として以下の二点が検出できた。第一は、産地として常に高い技術を共有、更新することが歴史的に地域ぐるみの慣習であったことである。第二は、家族農業経営のなかで作業工程が歴史的に性役割分業になっており、女性も部分的に専門的技術を担ってきた経緯があったことである。そのため女性の技術向上に関する社会的認知が進んでいた。これらの技術共有のネットワークは現在でも機能しているが、業種を転換する農家が増加するとともに、技術保有の個別化も進むことがわかった。

生産技術全体を通して考えると、既述のように女性の専門技術は一部であり、経営全体にまつわる体系的な技術は男性が保有しており、それは世帯主から男性の後継者へと継承されていた。可視化できる女性の部分的な専門技術に対して、男性が保有し継承していた経営にまつわる全体的な技術は経験的で不可視な部分が多かった。

(3) 女性の熟練技術の社会的意義と経営への参画、地域へのインパクト

調査データと先行研究および統計分析から、女性の担う専門的な作業が生産全体の中でどのような位置づけとなるのかについて考察した。その結果、雇用を持つ規模の苗生産農家の経営では、女性の専門的技術への認知は高く、雇用の創出も含めて地域へのインパクトが強かった。女性の専門技術は部分的で独立しており男性の技術とは異なっていた。男性に継承されている技

術と女性の保有する技術との違いは、農業のジェンダーを考える上で重要である。さらに、女性の専門技術が高く評価され社会的にも認知されているにも関わらず、残念ながら、女性は経営に直結する意思決定には参画していなかった。複合経営や家族農業経営の場合、女性が経営にまつわる意思決定へ参画するには多くの課題があることが明らかとなった。

採種農業者の保有する熟練技術については、農業者として現金収入を得ることができる技術であるにも関わらず、その社会的意義が広く認知されているわけではなく、また、地域へのインパクトも弱かった。採種農業者の技術は、自家農業のみならず地域農業や地域社会の発展的展開の重要な要素であるが、地域に還元されず企業に取り込まれていた。

自家農業における採種と育苗については、技術は知識として継承されていたが、実践としては残されていないことが明らかになった。その背景には、伝統的な熟練技術をあまり必要としない改良された種苗の登場や、ホームセンターでの種苗の購入があり、伝統的な技術の伝承よりも企業が提供する最適な情報を優先する農業者の姿勢が浮き彫りになった。情報を共有する際にもこのことが完徹しており、女性の技術伝承のネットワークは新しい情報伝達ツールとして再編されていた。

また、地域へのインパクトという点で、育苗農家の経営において、女性の雇用労働力が供給される地域の特徴を把握することができた。都市近郊型の特殊な労働形態と専門技術型の雇用を必要とする業種の存在、雇用者を採用する女性ネットワークが形成される背景の解明は残された今後の課題である。

本研究では、種苗生産における女性の熟練労働の実態を把握し、それらの社会経済的意義と地域農業や社会の発展的展開に果たす役割を考察した。女性の保有技術に関する考察の一部は「Farm mechanisation and its impact on women's labour: the case of Shiga Prefecture」(2019)にまとめ、他方で、女性農業者の技術評価を推進することや女性の技術取得への課題については、「世代で異なる女性農業者の活動とその再編」(2018)にまとめた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 柏尾珠紀	4. 巻 第583号
2. 論文標題 女性農業者の活躍と課題 支援者としての農業委員会の役割に期待	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 農政調査時報	6. 最初と最後の頁 9-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Tamaki Kashio	4. 巻 Vol.9, No.1
2. 論文標題 Farm mechanisation and its impact on women's labour: the case of Shiga Prefecture, Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The Journal of the Foundation for Agrarian Studies	6. 最初と最後の頁 33-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 柏尾珠紀	4. 巻 1(85)No.1
2. 論文標題 世代で異なる女性農業者の活動とその再編	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 農業と経済	6. 最初と最後の頁 6-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 柏尾珠紀・原田英美	4. 巻 1(85)No.1
2. 論文標題 農林行政職員からみた農業・農村女性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 農業と経済	6. 最初と最後の頁 89 98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柏尾珠紀	4. 巻 1(15)
2. 論文標題 環境保全型イベントが地域社会に及ぼす影響	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 滋賀大学環境総合研究センター年報	6. 最初と最後の頁 33-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Tamaki Kashio
2. 発表標題 Farm mechanisation and its impact on women's labour: the case of Shiga Prefecture, Japan
3. 学会等名 Conference on Women's Work in Rural Economies, India Foundation for Agrarian Studies (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 秋津元輝・佐藤洋一郎・竹之内裕文編著 波多野豪、藤本稯彦、辻村英之、立川雅司、安井大輔、中村麻里、柏尾珠紀著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 310(199-222)
3. 書名 農と食の新しい倫理	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----